



福島放技ニュース

THE NEWS OF THE FUKUSHIMA ASSOCIATION OF RADIOLOGICAL TECHNOLOGISTS

2011
8月25日号127
VOL.

発行所 社団法人 福島県放射線技師会

〒960-8003 福島市森合字蒲原16-7 TEL/FAX 024 (659)1043

ホームページアドレス <http://fart.jp/>

巻頭言

鈴木憲二会長を偲ぶ



副会長 齋藤 康雄

いまだ信じ難いことであるが、7月16日未明に鈴木会長が急逝された。余りにも突如な訃報に耳を疑い戸惑った。返す言葉が無く無言のまま時間が過ぎたことを憶えている。我に返り、時間が経つにつれて走馬燈のように、いろいろなことが思い出された。

3月11日の東日本大震災の余韻がいまだ消え得ず、あれから5ヶ月が過ぎたというのに、福島県の被災地は、地震、津波に加えて、誰もが思ってもみなかった原発事故で、多量に放出された放射能に翻弄され、それに伴う新たな問題が次々と起こり、いまだに避難された方々が戻ることができる具体的な解決の目処さえ立っていない。そんな中で、原発関連防災や事故対応を熟知した鈴木会長を失うということは、福島県放射線技師会の損失は言うに及ばず、福島県との円滑な協力体制を維持し、福島県民の安心と安全を守ろうとしている時、その痛手は大きい。

思い起こせば、昨年度末に起こった震災は本会の運営にも大きく影響し、鈴木会長にも多大な負担を掛ける結果になってしまった。5月に予定していた平成23年度定期総会は、いわき市の新舞子ハイツが被災して使用できず、急遽郡山市のユラックス熱海での開催になった。その対応は、浜通り支部と県南支部が協力して当たることになったものの、浜通りの沿岸部は壊滅的な被害を受け、原発のある中部を境にいわき地区と相双地区が分断された。原発事故による高線量地域に立ち入り禁止区域が設けられ、住まいを失い、勤めている医療施設の再開の見通しが立たないなど、浜通り支部の会員は総会どころではなく、他支部や県外に異動した会員も少なくなかった。鈴木会長はその被災者にも心を痛めておられた。新年度の役員人事も課題になった。改選と言うことで進んでいたが、執行部での話し合いの結果、今般の震災・原発事故は未曾有のことであり、震災からの復興、福島県等への対外的な対応の継続と、今後福島県民の不安を取り除く啓発活動を促進するためにも、三役、監事は留任し現体制を維持してこの難局を乗り切るとの合意のもとに、鈴木会長には負担をかけることになるが、継続して会長職をお願いすることになった。

5月の定期総会、6月の第1回理事会、改選後の実務担当者の会議である合同委員会も終わり、23年度の事業計画が始動し始めた矢先の出来事であった。技師会会務はもとより、とりわけ、福島第1原発の汚染スクリーニングでは、発生から4ヶ月間は福島県対策本部の朝夕の会議を欠席することなく詰めて、各スクリーニング会場への県内の放射線技師の手配や、全国からの放射線

技師の要請のために日本放射線技師会対策本部との連絡など、現地対策本部長として奔走された。放射線技師が足りないときには自ら現場に出かけ実務を担当したこともあった。鈴木会長がいたことにより、放射線技師会と福島県災害対策本部との連携が取れていた。だが、その陰には計り知れないご苦労があったに違いない。

日本放射線技師会では、災害対策委員長として全国放射線技師会ネットワークを構築し、全国の原子力発電所の事故発生時の相互扶助システムを企画していたが、この度の福島第1原子力発電所の事故発生では、図らずも鈴木会長自らが企画したシステムを、地元で現地対策本部長として実践することになってしまった。この活動で、放射線技師は約3万人の放射線汚染スクリーニングを行い、円滑な避難活動に協力することによる県民に対する貢献度は計り知れないものがある。

また、鈴木会長は40年にわたり福島医科大学の放射線技師として、診療と研究に精励し、業績も多数残している。その中で、なんと言っても最初の螺旋状（ヘリカル）CTを世に出したことではないだろうか。片倉氏らとの弛み無い昼夜の研究から生まれたもので、世界中から注目された。それらを含め、研究業績は論文181編、学術発表316回に及び、シンポジストや講演なども多く、全国レベルの各種研究会の世話人、理事を務めるなど、まさに日本の放射線技術をリードしてこられた方でもある。

福島県放射線技師会においては、昭和49年入会后、県北支部理事、平成9年に開催された全国放射線技師学術大会では、現地実行委員長として大会を成功に導いた。平成13年に本会理事、平成17年から副会長、平成21年には推されて会長に就任した。平成22年に日本放射線技師会東北地域理事に就任し、同時に災害対策委員長として先に述べたように、全国技師会ネットワークを構築し、原子力事故発生時の相互扶助システムや防災訓練の企画に取り組んでおられた。多くの実践データを持ちながら、完成半ばにして逝かれ、無念であったらと思う。

「大変だったんだよ」と言いながらも、話をすると「わかった」と言って引き受けてくださる。包容力があり頼りがいのある親分と言っても過言ではあるまい。せっせと自ら汗を流している姿が印象的でもあった。できるから動けるし、分かるから采配ができる。そのリーダーとしてのあるべき姿に、うらやましく思ったことも少なくない。放射線技師になるためにこの世に生を受けてこられたかのように、この分野で多大な業績を残し、後進の育成にも尽力された。退職後これからは自分の時間が持てると思っていた矢先に突然襲ってきた大地震と津波で起こった原発事故。持ち前の行動力で放射性物質の放出による汚染から県民を守るために奔走し、その収束を見届けられないまま、半ばにして生涯を閉じられた。放射線業務を生業として全うされた姿に、尊敬の念を抱かずにはいられない。

社団法人福島県放射線技師会長として、会員の声に耳を傾け、会員の資質の向上や県民への質の高い医療の提供を見据えて、今必要なこと、やらなければならないことには、自らの信念を貫き前向きに取り組んでこられた。今後、我々は一丸となって鈴木会長の意思を引き継いで行かなければならない。皆さんの尚一層のご協力をお願いしたい。

鈴木会長の在りし日を偲ぶとともに、この場をお借りしてお世話になったことへの御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

報 告

社団法人福島県放射線技師会
鈴木憲二会長が、7月16日に急
逝されました。鈴木会長は平成
21年度から社団法人福島県放射
線技師会の会長を片倉前会長か
ら引き受けられ、「3.11」の
東日本大震災以降は福島県災害対策本部に詰められ、
県内の放射線スクリーニング活動に強い意志と情熱
を持って取り組み、多大な貢献をされてまいりまし
た。



謹んでご冥福をお祈りいたしますと共に会員の皆
様に報告いたします。

第64回（平成23年度）総会開く

第64回(社)福島県放射線技師会総会が、5月21日、22日
郡山市「ユラックス熱海」で開催された。今回は浜通り
支部が担当支部であることより、当初いわき市で開催す
ることで計画を進めてきたが、3月11日に発生した東日
本大震災により開催予定施設は壊滅的被害を受け理事会
に諮り県南支部の支援を受け急遽「ユラックス熱海」で
開催することができた。

総会に先立ち各分科会から平成22年度の活動報告が行
われた後、特別講演が一般公開形式で「死亡時画像病理
診断 (Ai) について」と題して国際医療福祉大学 保健
医療学部 放射線・情報化学科 樋口清孝先生から死亡
後の遺体を解剖に代わってCTやMRIで調べる死亡時画
像病理診断についてわかり易い内容で事例も含めた最新
の知識や今後の活用の広がりについて説明がなされ、大
変有意義な講演となった。

総会は会長挨拶の後表彰式が行われ、日本放射線技師
会学術大会で表彰される30年永年勤続の会員は佐藤孝則
(県立医大)、村上和幸 (川俣病院)、橋本哲夫 (梁川町
保険病院)、岩東正人 (白河厚生)、新里昌一 (太田西ノ
内)、大竹久人 (はせがわ整形)、平塚幸裕 (県立会津)、
池田孝男 (竹田総合)、古内孝紀 (渡辺病院) の各人の
名前が読み上げられた。20年永年勤続は阿部雅浩 (保健
衛生) 他11名、学術奨励賞は、遠藤 潤 (星総合)、林
伸也 (太田西ノ内) の両名が選ばれた。

総会は、議会運営委員長の菅原正志氏より、本総会は
会員総数633名中467名の出席があり、成立する旨の宣言
があった。議長に鈴木規芳及び白石嘉博の両氏が選出さ
れ、提案された議案は、原案通り可決された。平成23・
24年度の役員改選では、候補者が定数の範囲内であるこ
とより拍手で承認され、会長選出は定款規約に従い鈴木
憲二氏 (重任) の信任投票が行われ承認された。

平成23・24年度 (社)福島県放射線技師会役員名簿

役 職	氏 名	勤 務 先
会 長	鈴木 憲二	
副 会 長	齋藤 康雄	坪井病院
副 会 長	遊佐 烈	県立医大病院
理 事	佐藤 靖芳	大原医療センター
理 事	今野 広一	総合磐城共立病院
理 事	佐藤 政春	三春病院
理 事	白川 義廣	竹田総合病院
理 事	平井 和子	北福島医療センター
理 事	佐藤 佳晴	公立藤田病院
理 事	嶋田 峻二	南相馬市立総合病院
理 事	古川 義一	かしま病院
理 事	渡辺 和夫	太田西ノ内病院
理 事	菅野 和之	根本クリニック
理 事	小松 一文	会津中央病院
理 事	渡部 育夫	県立会津総合病院
理 事	新里 昌一	太田西ノ内病院
理 事	堀江 常満	大原医療センター
監 事	片倉 俊彦	
事務局長	伊藤 陸郎	
事務局員	阿部 郁明	県立医大病院

平成23年度 第1回理事会開催される

日 時：平成23年6月3日

場 所：県立医科病院放射線部カンファランス室

出席者：(会長) 鈴木憲二、(副会長) 齋藤康雄、遊佐烈、
(理事) 佐藤靖芳、今野広一、佐藤政春、平井
和子、佐藤佳晴、嶋田峻二、古川義一、渡辺和夫、
菅野和之、小松一文、渡部育夫、新里昌一、
堀江常満
(事務局) 伊藤陸郎、阿部郁明

欠席者：(理事) 白川義廣、(監事) 片倉俊彦

議長に遊佐副会長、議事録作成人に会津支部 (渡部育
夫) を選び議事に入る。議事に先立ち今年度の役員改選
により新理事も含めた各理事から自己紹介。

議題1 平成23年度業務予定

役務分担

各委員会について役務分担が示され、了承された。

委員会報告

学術委員会長より、

- 学術大会開催及び演題募集についてホームページ
に掲載することをホームページ委員会に依頼した。
ランチョンセミナーについては、第一三共と協議中
である。公開講座はシンポジウムを行う方向で準
備を進める。

- 第27回診療放射線技師総合学術大会への座長10名
を推薦した。

以上の報告があった。

生涯学習委員長より、

- 生涯学習システムが今年度から変更となり、全国を8ブロックに分け福島県は東北地区になる。今年度は福島県に於いて、放射線管理士更新時講習会、日本X線CT専門技師認定機構との共催で講習を行う、また東北の責任者となる事となった。
- 新卒者を対象とした講習会を福島県放射線技師会として開催するよう日放技からの要請があった。福島県放射線技師会としては、医学用語略語辞典を事前に技師会入会及び講習会予約することで進呈する。対象者は、技師免許取得3年以内としたいとの報告があった。
- X線CT専門技師認定講習会については8月20日、21日に仙台か福島で開催予定。

合同委員会

6月18日 県立医大臨床講義室で午後2時より開催する事に決定した。

各種講習会開催予定

マンモグラフィ従事者講習会の開催を今年度も開催する方向でいるが、マンモグラフィ講習会への参加予定人数を把握した上で実施を検討したい。

胃がん検診従事者研修会についても会場の都合が付けば開催の方向で検討したいとの会長からの発言があった。

その他

*会費納入について

- 会費納入規定について、第5条会費納入免除の取り扱いについての改正が議決され平成23年6月3日付けで施行される事が決定された。
- 日放技についても、県の会長が報告することで該当となることが確認された。

*スクリーニング派遣要請について

- 6月4日より6月9日まで、緊急被ばくスクリーニング派遣要請があり各支部より派遣する事に決定した。

*第27回総合学術大会に演題を募集し、発表される会員に事前登録券を進呈する。

*福島県内の診療放射線技師把握のために従事者アンケートを実施する。

平成23・24年度役務分担一覧

精度管理委員会

氏名	支部	勤務先
渡部 育夫	会津	県立会津総合病院
古川 義一	浜通	かしま病院
松井 大樹	県北	北福島医療センター
古川 徹	県北	柊記念病院
斉藤 由起	県南	太田西ノ内病院
鍵谷 勝	県南	総合南東北病院
佐竹 一博	会津	竹田総合病院
星 寿郎	会津	高田厚生総合病院
池田 昭文	浜通	渡辺病院
栗田 祐二	浜通	公立相馬総合病院

調査委員会

氏名	支部	勤務先
渡辺 和夫	県南	太田西ノ内病院
嶋田 峻二	浜通	南相馬市立総合病院
佐藤 久光	県北	総合病院福島赤十字病院
佐藤 孝広	県北	社会保険福島二本松病院
増子 勇一	県南	寿泉堂総合病院
目黒 昭夫	会津	県立会津総合病院
千葉 雄二	会津	保健衛生協会会津地区センター
大和田重義	浜通	公立相馬総合病院
船生 晴雄	浜通	松村総合病院

学術委員会

氏名	支部	勤務先
新里 昌一	県南	太田西ノ内病院
白川 義廣	会津	竹田総合病院
佐藤 勝美	県北	県立医大病院
遠藤 浩	県北	福島総合病院
白石 嘉博	県南	星総合病院
田代 和広	県南	白河厚生総合病院
足利 広行	会津	竹田総合病院
工藤 靖之	会津	竹田総合病院
村上 光幸	浜通	総合磐城共立病院
久米本祐樹	浜通	南相馬市立総合病院
庭山 洋	県南	太田西ノ内病院
大河内 徹	県南	太田西ノ内病院

編集広報委員会

氏名	支部	勤務先
今野 広一	浜通	総合磐城共立病院
佐藤 靖芳	県北	大原医療センター
平井 和子	県北	北福島医療センター
池田 正光	県北	県立医大病院
丹治 孝一	県北	福島県保健衛生協会
幕田 節男	県南	厚生連塙厚生病院
本間 妙	県南	総合南東北病院
森谷 辰裕	会津	会津中央病院
遠山 和幸	会津	県立会津総合病院
村上 薫	浜通	相馬中央病院
鈴木 規芳	浜通	呉羽総合病院

ネットワーク委員会

氏名	支部	勤務先
菅野 和之	県南	根本クリニック
小松 一文	会津	会津中央病院
遊佐 雅徳	県北	県立医大病院
阿部 智	県北	大原医療センター
福田 和也	県南	公立岩瀬病院
鈴木 雅博	会津	竹田総合病院
秋山 淳一	浜通	常磐病院
石森 光一	県南	白河厚生総合病院

生涯教育委員会

氏名	支部	勤務先
堀江 常満	県北	大原医療センター
佐藤 政春	県南	三春町立三春病院
後藤 孝	県北	県立医大病院
笹木 毅	県北	公立藤田総合病院
金沢 孝彦	県南	白河厚生総合病院
濱端 孝彦	県南	坪井病院
山下 朋廣	会津	竹田総合病院
平塚 幸裕	会津	県立会津総合病院
菅原 正志	浜通	福島労災病院
花井 辰夫	浜通	南相馬市立病院

財務委員会

氏名	支部	勤務先
佐藤 佳晴	県南	公立藤田病院
佐藤 孝則	県北	県立医大大学病院
菅野 修一	県南	田村市立都路診療所
星 剛志	会津	入澤病院
角浜 憲孝	浜通	総合磐城共立病院
阿部 郁明	県北	県立医大病院

平成23・24年度支部役員一覧

県北支部

支部長	佐藤 靖芳	大原医療センター
副支部長	佐藤 勝美	県立医大病院
副支部長	平井 和子	北福島医療センター
理事	佐藤 孝則	県立医大病院
理事	後藤 孝	県立医大病院
理事	遊佐 雅徳	県立医大病院
理事	池田 正光	県立医大病院
理事	丹治 孝一	福島県保健衛生協会
理事	笹木 毅	公立藤田総合病院
理事	遠藤 浩	福島総合病院
理事	佐藤 久光	福島赤十字病院
理事	佐藤 孝広	社会保険福島二本松病院
理事	阿部 智	大原医療センター
理事	松井 大樹	北福島医療センター
理事	古川 徹	栢記念病院
監事	佐藤 佳晴	公立藤田総合病院
監事	今野英麻呂	福島赤十字病院

県南支部

支部長	佐藤 政春	三春病院
副支部長	渡辺 和夫	太田西ノ内病院
副支部長	菅野 和之	根本クリニック
監事	新里 昌一	太田西ノ内病院
事務局	白石 嘉博	星総合病院
常任理事	齋藤 康雄	坪井病院
常任理事	幕田 節男	厚生連塙厚生病院
理事	本間 妙	総合南東北病院
理事	福田 和也	公立岩瀬病院

理事	菅野 修一	田村市立都路診療所
理事	斉藤 由起	太田西ノ内病院
理事	田代 和広	白河厚生総合病院
理事	増子 勇一	寿泉堂総合病院
理事	浜端 孝彦	坪井病院
理事	鍵谷 勝	総合南東北病院
理事	伊藤 拓郎	須賀川病院
理事	鈴木 博文	星富久山医院
理事	金沢 孝彦	白河厚生総合病院
監事	山口 大	寿泉堂総合病院

会津支部

支部長	白川 義廣	竹田総合病院
副支部長	渡部 育夫	県立会津総合病院
副支部長	小松 一文	会津中央病院
会計	星 剛志	入澤病院
事務局	松枝 直宏	竹田総合病院
監査	山田 隆弘	会津中央病院
監査	目黒 昭夫	県立会津総合病院
厚生	奈良坂真弘	町立猪苗代病院
厚生	弓田賀津江	飯塚病院付属有隣病院
厚生	山下 朋廣	竹田総合病院
学術	小沼慎一郎	会津中央病院
学術	穴澤 明弘	坂下厚生総合病院
学術	金田 昭二	県立会津総合病院
マンモ専任	松野 佳子	竹田総合病院
編集	遠山 和幸	県立会津総合病院
編集	森谷 辰裕	会津中央病院
表彰	秦 昭吉	県立宮下病院
顧問	中丸 俊一	佐藤病院
顧問	佐藤 幸志	自宅
顧問	馬場 栄二	福田耳鼻咽喉科
顧問	坂本 弘道	磐梯町健康医療福祉センター 瑠璃の里

浜通り支部

支部長	今野 広一	総合磐城共立病院
副支部長	嶋田 峻二	南相馬市立総合病院
副支部長	古川 義一	かしま病院
理事	船生 晴雄	松村総合病院
理事	鈴木 規芳	呉羽総合病院
理事	菅原 正志	福島労災病院
理事	角浜 憲孝	総合磐城共立病院
理事	栗田 祐二	公立相馬総合病院
理事	村上 薫	相馬中央病院
理事	池田 昭文	渡辺病院
理事	大和田重義	公立相馬総合病院
理事	加藤 陽一	双葉厚生病院
幹事	花井 辰夫	南相馬市立総合病院
幹事	秋山 淳一	ときわ会常磐病院

「放射線・放射能を正しく理解するための市民公開講座」が開催される

平成23年7月10日(日)福島市の「コラッセふくしま」において「放射線・放射能を正しく理解するための市民公開講座」が開催された。日本放射線技術学会・東北部会・放射線防護分科会・計測分科会の主催で行われ、福島県放射線技師会も後援として加わり充実した内容の公開講座となった。東北放射線技術部会の遊佐烈理事（県技師会副会長）並びに、丹治一理事が日本放射線技術学会に働きかけをし、今回福島での開催となった。準備期間の



短い中、北福島医療センターや福島医大の会員が中心となり準備が進められた。参加の事前予約申し込みについては、一般市民の放射線・放射能に対する関心が非常に高く、当日参加の340名の定員枠は、新聞に掲載された日の午前中にすでに締め切りとなってしまった。その後も連日、申し込みの依頼が殺到し県外からの参加希望者も数多くいたようであった。当日も、先着順で160名の参加枠であったが、朝早くから列をつくるほどであった。

はじめに、東北大学大学院医学系研究科保健学専攻千田浩一先生が「放射線の単位と測定方法を学ぼう・シーベルトやベクレルってなに？」とのテーマで、放射能と放射線の違いや放射線の単位について分かりやすく説明した。またそれらを測る測定器の原理や利用方法についても詳しく説明され、メモを取りながら真剣に聞き入る参加者も多く見られた。次に、福島県立医科大学 穴戸文男先生の座長で、「身体と放射線・放射線の影響について考えよう」とのテーマで3題の講演が行われた。まず、広島大学放射線災害医学研究センター 細井義夫先生が「外部被ばくについて」と題し、放射線による主なDNA損傷と修復、放射線が人体の細胞にどのような作用を起こすかについて話された。外部被ばくについては様々な種類があり、防護の3原則（時間・距離・遮蔽）によって軽減できると話され、放射線による影響（確率的影響と確定的影響）についても専門的な立場からその違いや起こる疾患について説明した。次に、「内部被ばくを理解しよう」と題し、福島県立医科大学放射線科宮崎真先生が内部被ばくの推定方法である実測法やバイオアッセイ法について、また食品の暫定規制値や、セシウム・ヨウ素等の核種による人体内の挙動など例をあげ

ながら詳しく解説した。次に、長崎大学大学院医歯薬総合研究科 山下俊一先生が「小児について考えてみよう」と題し、原爆被爆者やチェルノブイリのデータを使いながら発がんリスクについて幅広い講演をした。100mSv以下の低線量での発がんリスクは広島・長崎の原爆被爆者の追跡調査でも影響を確認出来ない程度であり、過剰な心配や不安は避けるべきであると話された。低線量被ばくでは確率的影響のリスクが異なるとも話され、胎児においては放射線感受性が高いが同時に回復力も高いとのお話であった。最後に総合討論が行われ、「屋根・壁などの除染で有効な方法はないのか」「ICRPの線量設定の基準について教えてほしい」など多くの質問があった。また、「福島で健康に生きられるようにするには・・・」「子供たちの風評被害をなくしてほしい・・・」など参加者からの切実な訴えもあった。



講演会会場の外では入場できなかった方や、参加された方に少しでも放射線に対する不安を解消して頂くために、放射線防護委員会や技師会の担当者による「質問コーナー」が設けられた。衣食住についての不安や、子供の内部被ばくについてなど多岐にわたる質問があり、それに対して丁寧にお応えする担当者の姿が印象的であった。参加者には今回の公開講座開催にあたり作成された「正しい理解と安心のためのQ&A」という冊子が配布された。この冊子は事前に寄せられた多くの疑問や質問（全83問）に放射線防護委員会がお答えしたもので大変に好評のようであった。今回、福島で開催された公開講座は、放射線技師会が市民の方々に対して、放射能・放射線について少しでも不安を少なくし、正しい知識と情報を提供する事ができた有意義な企画であったと思います。

役員として参加された皆様、大変に暑い中また遅い時間まで本当にご苦勞様でした。（池田）

編集後記

「人事を尽くして天命を待つ」ということばがある。東日本大震災での対応で急逝された鈴木会長はこのような気持ちではなかっただろうか。これに比べて国の対応はどうだろう。原子力や放射線の専門家と呼ばれる方々はどのような対応を行ったか。全てが後手に回り歯痒い思いをしているのは私だけでしょうか。（鈴木）